

---

# とある逆ハー女の受難

佐々木 薊美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある逆ハー女の受難

### 【Nコード】

N3749BA

### 【作者名】

佐々木 薊美

### 【あらすじ】

逆ハー属性（ただし全員変態）を持った少女のある日の帰り道。

はあ、とわたしは溜め息をついた。

それもこれもあいつらのせいだ。

『あいつら』というのは、わたしの取り巻き連中の事だ。

ギャルゲー好きな我が友人（女）曰わく、わたしは『逆ハー属性』らしい。

わたしも夢見る乙女なので、様々なタイプの美形たちに好かれてちやほやされるのに憧れた事はあったよ？

しかし、わたしの今現在の状況はあまりにも『逆ハー』とは違い過ぎてはいないだろうか。

合っているのは『美形たちに好かれ』の部分だけだと思う。

『様々なタイプ』のところも合っていると言えば合っている。

ただし、その場合、後に続くのは『変態』の二文字であるが。

そう、『あいつら』は 変態なのである。

ストーカーは序の口。サディストもいれば、その真逆、DMもいる。小学生当時から、つきまといってくるロリコンに、死体希望なネクロヒイリア。挙げ句の果てに、中学生の弟のは可愛いとかのたまたまって頭を撫でてくる。

何、この、変態のオードブル。

しかも、全員揃いも揃って美形なのが残念なところだ。

残念な美形って本当にいたんだね。

むしろ、残念な美形通り越して残念過ぎる美形と呼びたい。

あいつら、中身良かったら、わたしの乙女の夢実現なのに。

と、言いたいところだが、そこで『良かったら』ではなく『せめて、まともであったら』と思わせてしまうのが、あいつらのあいつらたる所以だろう。

まったく、この無駄な属性はなんとかならないものか。

好かれるんだったら、美形じゃなくても複数じゃなくてもいいか

ら、正常な性癖の人に好かれたかった。

なんで、こんな属性があるのだろう。前世で何か悪い事したか？それとも、その逆で褒美として逆ハー属性授けようとして失敗したとか？できない事は頑張らなくていいのに。

こんな星の下に生んだ神を恨みたい。

とりあえず、教室ごとに黒板の上に掛かっている十字架 キリスト教系の女子校に通っているのをへし折ってこようか。

あれ？キリスト教に輪廻転生思想は無いんだっけ？

輪廻転生は仏教か。

まあ、そんなのはどうでもいい。

ひとまず、家路に着こう。

わたしが女子校に通っているのは、第一に変態避けのためだ。

共学よりは女子校の方が新たな変態に遭遇する確率が低い。男性教師ぐらいしか警戒対象はいないし、基本的に教師は女性なので安心度が高い。

それに、あのストーカーはわたしと同一年で、しかも（わたしにとっては）残念な事に成績優秀なので、共学だったらどの学校に行っても絶対に付いてきただろう事が予想される。

校内でもほぼぼと背後に気配と視線を感じながら過ごしていた中学生時代を思い出す。

神経が磨り減る毎日だった。

ただでさえ、家が隣だから、登校時の朝っぱらから尾行されて疲れるのに、学校でも一日中付け回されて、それが六年も続いたら身が持たない。

三年間、わたし、よく耐えた。

だが、あいつもそう甘くはなかった。

校門から一歩踏み出すと同時に警戒レベルを引き上げる。

ここからが勝負の始まりだ。  
後ろから気配を感じる。

しかし、気にしない。

そう言いよらせる。

視線だけだ。その分ましだ。

そう言いよらせる。

うーん、常に背後からの視線って地味に心のHP削られるんだよな……。

しかし視線だけって、あいつのストーキングスキルも上がったな。姿見えないし、一体どこでこそこそしてんだろう。そんな無駄な技術身に付けなくていいのに。暗殺者にでもなる気か。多分、あいつ、今すぐにでも諜報機関入れるよ。

あのスキルが無ければ、その王子様の如き端麗な容姿故に、男に飢えたきやぴきやぴした女生徒どもにたかられて、動きとれなくなったり、そっちの対応に忙しくてわたしを見逃したり、あわよくばその女子どもにどこかに強制的に連れて行かれたりするかもしれないのに。

できるだけ視線を黙殺しながら、順調に歩みを進める。

頭上には青空。秋の陽光は柔らかだ。

何の特色もない民家の群れの中を縫うようにして進む。無論、

あいつを撒こうだなんて無茶はしていない。

いつも通りの帰り道　だと思っただが、進む道の途上にある見知った車が目に入ると、わたしは歩を止めた。

なぜ、あやつのが………？

白い外国車。わたしは車とかに詳しく無いので名前は知らない。

ただ同じ車種かと期待を込め確認するが、ナンバープレートを見ても間違いない。

ロリコンの車だった。

お前、何、待ち伏せしてるんだ。

うん、ここは回避しよう！

ここから、あちらは見えるものの、あいつはまだこちらに気が付いていないようなので、すぐその左側の小路を通り迂回して行く事にした。

そうすると、自宅へは回り道になるが仕方がない。

それと念のために、家に行く前に少し兄様の所で時間を潰していく事にした。

兄様は探偵だ。決して難事件を見事解決！的な意味合いではなく、浮気調査とかを主とする職業的な意味合いで。彼はまた、わたしを狙ってこない美形という意味で貴重な存在でもある。何故なら、兄様は同性愛者だからだ。馴れ初めがわたしを少年だと思つて誘拐した事だったのは、ひとまず置いておく。どっちにしても変態かつ美形である事は変わらないが、わたしを対象にしないので全く問題は無い。

周囲の住宅とそれほど変わらないサイズの灰色のビル。打ちっぱなしのコンクリートが温かみのある色彩の一般住居から浮いている。一階部分が駐車場となっており、黒い車が収まっている。その横の狭い階段が二階部分の事務所へと通じる唯一のルートだ。

階段を上り、安っぽいスチールの扉を引く。

「兄様！助けて下さい！」

事務所内の道路側にある机で何か作業をしていた兄様に叫ぶ。

もとい、救援を求めろ。

「あ…、仕事の邪魔でした？」

「いや、全く問題ない。趣味だから」

笑顔で言い放つ兄様。服も髪型も極標準的なサラリーマンのような装いなのにそう思わせないのは、その美貌故だろう。ストーカーの茶色い髪と虹彩にしる、ネクロヒイリアのオッドアイにしる、他の美形どもはどこかしら変わった特徴を持っているけど、この人にはそれが無い。これもあいつらとは違う所だ。あいつらの特徴はそれだけで格好良く見える類のものなので、もしかしたら兄様が一番美形なんじゃないかと思う。じゃなくて。

おい、仕事しろ。

「それがさ、最近仕事なくってね」

疑問が顔に出てたのか兄様が言う。

「大丈夫ですか？」

主に生活費とか。

目の前にあつた応接セットの一人掛けの方に座りながら、兄様に訊く。

二人掛けのソファと一人掛けのソファ2つがテーブルを挟んで向かい合っている。ソファは黒い革張りでふかふかしていて割と高そうだ。

「てな事で仕事探して来い」

「無理です。変な無茶振りしないで下さい」

「嫌ですの間違いじゃなくて？」

「わたしが何のためにここに避難して来たと思ってるんですか？『避難』ですよ、『避難』。逃げて来たんです。ここから出ていったら、またわたしは我が身を危険に晒す羽目になるんですから、みすみす出て行ける訳ないじゃないですか」

「まだ、あいつに追い掛け回されてるの？」

「ええ、一向に止める様子もなく、ストーキングスキルも日々向上の一途を辿っております」

「あはは、それは、それは」

「笑わないで下さい。追い掛け回される方は大変なんですから！大體、貴方が盗聴とか変な事教えるからいけないんです！」

「だってバイトだもん」

「だもんじゃないです。いい歳して。大體、あれ、違法じゃないですか！」

わたしとあのストーカーは小学生の時、ここでバイトしていた。

児童労働禁止法とか無視で。当時はわたしもそんな法律ある事知らなかったの、普通に働いていたが、後から思えば正式な雇用契約ではなかったのだろう。

ちなみに、わたしもその時、盗聴・盗撮のスキルは一通りマスターしている。やられたらやり返せ精神でそれでストーカーに対抗しようと思った事もあったが、そんな事したらあいつと同じ穴の貉だし、何よりあいつの日常生活なんて知りたくもないので止めておいた。

何故、違法行為をしてまでわたし達に少年探偵団紛いの事をやらせてたんだろうか。以前本人に訊いてみたら「可愛いから」という答えが返ってきた。

可愛ければいいのかよ。

法律は守れ。捕まるから。

何にせよ、可愛い少年少女は目の保養になるよね、だそうだ。まあ、確かにそれはそうだが、それとこれとは別だと思う。

ほら、名探偵・明智小五郎にも小林少年を始めとする少年探偵団があつたじゃないか、って抜かしていた事もあったが、それはフィクションの話だ。紅い夢の世界の譚だ。わたしはむしろここでのバイトで『探偵』に対する幻想を木っ端微塵に打ち砕かれた。わたしの純真な憧れを返せ。

そんなこんなで兄様と会話を繰り広げていると、がちやりとドアノブをひねる音がした。

客か、と期待を込めそちらを見やると日本人にしては茶色がかつた髪色と虹彩のわたしと同じくらいの年齢の学生服姿の美少年ストーカーが姿を表した。

「何だ、お前か……」

「僕で悪かったな、何でそんなに残念そうなんだ」

わたしの見るからに落胆した表情に奴が眉を顰める。

そんなわたしの反応とは対称的に兄様は嬉しそうだ。

兄様、美少年大好きですからね。貴方も変態ですからね。わたしが対象になつてないだけで。

わたしに普通に應對するからつい忘れそうになるけど。

そんな兄様の反応にストーカーはさらに眉間に皺を寄せる。

綺麗なお顔が台無し になつてない。美形つて得だな。

しかし、彼の表情を兄様は完璧に無視し、声を掛ける。

「やあ、蓬君」

脳天気な。

「お久しぶりですね」

そう笑みを浮かべ返すストーカー。

笑顔が引きつっていた。

君、兄様苦手だもんね…。

だからここに逃げて来たんだけど。

しかし、まさか入って来るとは計算外だった。

どちらにせよ変に後つけられる事はなくなるからいいんだけど。

わたしの向かい側のソファにさもそれが当然だとも言う様に腰

掛けるストーカーこと蓬君。

仕方がない。お茶でも入れるか。

一度、嘆息。

だめだ、最近溜め息が癖になつてる。

事務所の片隅の給湯室に行き、お湯を沸かす。急須と三つ湯呑み

を盆に載せて、応接セットまで運ぶ。さっきまでわたしが座つてた

場所の隣にいつの間にもやら兄様がいた。

再び先ほどと同じ場所に座り、それぞれの前に湯呑みを置く。

蓬君をやたらにここにこして眺める兄様とそれに引いた表情の蓬君。

どうだ、これでわたしの日頃の苦勞が少しでも分かったか。

ちよつと愉快的な気になる。

折角だ、こいつにもう少し苦勞をお裾分けしよう。

「蓬君、あのロリコンに遭遇せず、わたしを帰宅させて。ロリコン

が誰の事かは分かるよね？」

「勿論。何年、僕が君のストーカーをやつてると思つてるんだ」

何故か、胸を張り自慢気に言う蓬君。

いや、そこ、自慢できるところじゃないし。「ストーカー行為は一

応犯罪だよ？」

「大丈夫。警察に見つかる様なへまは犯さないさ」

そうでしたね。以前、通報した時も警察が見に来る前に盗聴器、隠しカメラ、ストーキングの痕跡全て跡形も無く消してましたね。それで警察には結局相手にされずに、でも、その翌日からストーキングはいつも通りに再開されたんだ。

って、ポイントそこじゃないし。

「ゆずがロリコンって呼んでるのは、日永さんの事でしょ？」

「いや、呼んでるんじゃないかって実際ロリコンなんだって」

『お嬢ちゃん、飴をあげようか』はまんまロリコンだ。ベタ過ぎるけど。

「初邂逅は6年前、近所の公園にて。弦口日永のプロフィール。誕生日、5月6日、29歳。国立〇〇大卒。就職先は×××コーポレーション。住所、〇〇県〇〇市。電話番号、

。預金銀行は# #銀行。暗証番号は12130429。

さわりだけだとまあ、こんなもん？」

さわりだけでそれ？わたしの知らない情報が幾つもあったんだけど……。怖っ。てか、預金口座の暗証番号までって、お前、何する気だ。どっから手に入れた、その情報。こいつ本当に諜報員なれるよ。

「ちなみに、預金の暗証番号は前半がゆずの誕生日、後半が初邂逅の日付だ」

気持ち悪っ！ロリコン気持ち悪っ！

いや、ロリコンであるという事実だけで既に十分気持ち悪いけど、この行動はさらに上をいく。

やめろ、今すぐやめろ。

「ゆずに関わる事で僕に知らない事なんて無い」

怖っ！ストーリーカー怖っ！

こっちはこっちで変態発言だけど、気持ち悪さより恐怖が勝る。

「ちなみに君、わたしの事どこまで知ってる？」

恐る恐る訊いてみた。

「知らない事はない」

最高の笑顔で断言された。

そうですか。ないんですか、知らない事。

「むしろ、ゆずの事だったら、ゆずが知らない事まで知ってるよ」  
わたしの知らない事ってなんだよ。

「本当の父親が誰かとか」

へ？

硬直した。

何、その昼ドラ展開？！望んじやいないんですけど！

「と、いうのは冗談だとして」

ほっと胸を撫で下ろす。

「悪い冗談はやめろ」

「僕がどこまで知ってるか言ったら、僕はゆずに変態として認識されちゃうじゃなくか」

何を言っている。

「安心して。ストーカーの時点で既に変態だと認識しているから」

「酷いなあ、ゆずは。僕がいつでも見守って、変質者を駆逐したりしてあげてるのに」

「勝手にやってなさい」

一部でも変質者を駆除してくれてるのはありがたいけど、自分もその一人だというのを忘れてる。

「だったら、事前にあのロリコンも何とかしてくれてればいいのに」

「仕方ないじゃん。僕は後を付けてるんだから」

「だから尾行はやめろ！」

「僕から生き甲斐を奪う気か？」

なんて下らない事に人生を費やす気だ。

いや、わたしには死活問題だけど。

「その労力と気力は他の事に使え」

「僕は頑張ったりしなくても他の事はできるし」

そうだった。こいつ、世間一般で言う王子様だった。

運動も勉強も完璧なんだった。努力なんてするまでもなく。妬ましいことに。

まったく、羨ましい。その能力を少しでも分けて欲しい。かくいうわたしも人並み以上には出来るんだけど。

「日永さんはただ待つてればその内いなくなるんじゃないの。僕ほど粘着質なのはゆずを追い掛け回してる人たちの中にはいないようだし、あの人は割りとあっさりしてる方だと思っ」

あの中ではね。あの粘着質な変態どももなかではね。てか、自分が粘着質な自覚はあるんだ……。

「ゆずの通学路には全部、死角なんてなく監視カメラをつけてるからそれで確認するといいいよ」

無造作に鞆からノートパソコンを取り出す。それを起動しすこしすると、画面に幾つかのウィンドウが開かれ、わたしのいつも通る道の風景が映し出されていた。

「……………」

こんな所にまでカメラしかけられてたんだ……………。すっかりわたしの家の中と周辺だけだと思ってた。

おかげで今は助かってるけど、感謝すればいいのか、怒っていいのか分からない。

感謝すべきではないのだろう、多分……………。

ひとつのウィンドウに白い乗用車　ロリコンの車があった。これが消えるのを待てばいいのか。

いなくなるのを待つ事30分。

その間、ストーカーと「つけまわすのはいい加減やめろ」「やだ」等の言い合いを延々とし、兄様に宥められたり、お菓子もらったりして過ごす。ストーカーは若干兄様に怯えていたが。いい気味。

白い車がやっと動き出した。

やった、これでやっと帰れる。

ふうと胸を撫で下ろす。

それもつかの間、蓬君が不吉な事を口走った。

「自分が見逃したかもとか思ってた移動したな」

他に開いたウィンドウを蓬君が示す。

え……………。

溜息を吐く。

「仕方ない。会う事覚悟で帰りますか……………」　　ロリコンの車が今度駐車されたのはわたしの家のほど近く。どう帰っても通らなければいけないコースだった。

「兄様。お邪魔しました」

事務所をわたしが立ち去ろうとするとストーカーももれなくついてきた。

こいつと帰るのは不本意だが一人よりは心強い。

兄様はやさしく微笑み、またねと返事をした。

外に出ると青かったはずの空は淵の方から橙色を帯びていた。

ストーカーは隣に住んでいるので　　というか中学入学と同時に親をどうやってか説得して引っ越して来たので自宅の前まで嫌でも一緒に帰る事になる。

「蓬君、君は後からついてくるの？それとも、一緒に帰るの？わたしとしては前方からの敵にも対応できるよう一緒に来てもらう方がありがたいんだけど」

緊急時だ。仕方がない。

「……………ああ」

眼をそらし曖昧な返事を返す。心なしか頬が赤いのは気のせいだろう。

はつきりしないので了承とみなす。

「じゃあ、一緒にいいよね？いこうか？」

二人で並んで歩く。勿論、ストーカーとは一定の距離を保ちながら。

嗚呼！後ろからの視線が無い帰路がこんなにもすばらしいなんて！

背後からの気配を感じない事に感動した。

唯、ロリコンを始めとし他にも警戒対象はいるので注意はしながら歩く。あのDSだったたら拉致監禁とか洒落になんないし。未遂までだったら経験あるし。

そんな風に思っていたら、本当にご本人が登場した。

後方から走ってきた黒い車がわたしの横、轢くすれすれで止まり、わたしを打とうとするかのように勢い良くドアが勢い良く開けられた。

だが、ストーカーの奴が腕を引っ張ったので、ぎりぎりよける事ができた。

危なっ！

こんなことする奴は一人しか心当たりが無い。

「何の用ですか、待宵さん？」

開けられたドアから出てきたのは案の定その人物だった。

黒づくめの服装 全て仕立ての良いことが分かる に身を包んだ年の頃、わたしより二つ三つ上の長髪の男性。男の人にはあまりいない長髪が似合っているのはその中性的な美貌のせい。腰ほどまである烏の濡れ羽色の綺麗な髪は後ろで一つに括っている。

「わたし、貴方のようなDSに用は無いんですが？」

「決まっているじゃないか。可愛い可愛いゆずりはちゃんの顔を見に来たに」

「そうですか。ご足労ありがとうございます。わたしは大丈夫ですので、お帰りください」

笑顔で返す。こいつに嫌がる表情なんて禁物だ。

というか、とつとと失せる。むしろこの世界から失せる。

「ひどいなあ、ゆずりはちゃんは。人がせつかく会いに来たのに」

「ひどいのは貴方でしょうに。いきなり車のドアで殴ろうとするとか鬼畜の所業以外の何物でもないでしょう」

「鬼畜だなんて照れるじゃないか」

「やめてください、変態。刺しますよ？」

「うふふ、刺されるよりは刺すほうが好みだな。でも刺すよりは縛って閉じ込めて鬺って遊ぶほうが好みだな」

『鬺る』の具体的な内容は問わない。怖いから。

「そういうことはよそでやってくださいね？わたしには縛られる趣味も閉じ込められる趣味も鬺られる趣味も無いんです」

「嫌がつてるから良いんじゃないか」

「いい加減にしたらどうです？そのうち殺されますよ、わたしに」「殺される前に殺すからね？」

「それで殺す前に鬺るとか言うんでしょう。全く救いようの無い人ですね。一旦故郷の地獄あたりに帰ったらいかがですか」

双方微笑みながらの物騒な会話にストーカーが心配そうな表情を横でしていた。

何を心配しているのだろうか。心配する事なんてないのに。

待宵さんが蓬君のほうを向いた。

「君は？」

待宵さんの目に剣呑な光が宿る。

何故だ。

ああ、わたしと歩いてるからか。

「蓬といます。はじめまして、待宵さん。貴方の事はゆずりはから聞いています」

仮面みたいな笑みで答える蓬君。

聞いたんじゃないかと、自分で調べたんですよ。

蓬君は握手を求めるように右手を差し出す。 笑顔 目が笑っ

てない笑顔で握手を交わす二人がなんか怖い。

だから、さつき蓬君はあんな表情をしたのか。わたしもこんな感じなんだろう。

「はじめまして、蓬君。君はいつたい何？」

「極々普通の高校生ですが？」

お前の何処が普通なんだ。王子様だし。ストーカーだし。諜報員並みだし。

「そういうんじゃない、ゆずりはの何？」

「ただのお隣さんですよ。一人で帰するのは危ないですからね」  
多分言外に貴方のような変態がいるからという意味を込めて。

「でも、ゆずりはちゃんは連れてくからね」

うわあ、これはおそらく世間で言うところの一人の女の子を二人の男性を取り合うという夢のような状況なのに、なんだろう、この殺伐とした感じ……………。

「じゃあ行くこうか、ゆずりはちゃん」

そう言うのと同時にわたしの手元で鳴るかちやりという音。

音のした方を見ると、右手に手錠がかかっていた。

待宵さんの顔を伺うと、待宵さんは、にっこりと、幸せそうに、  
でも、黒く、笑んだ。

やめる。外せ。迅速に！早く！

それとほぼ同じだった。待宵さんがくずおれたのは。

「っ?!」

何だ?!

蓬君の手にある黒いペンのようなもの。

「何、それ？」

「スタンガン」

何でそんな危なっかしい物持ってるの?!

「だめ?こいつ絶対危険だから意識奪ったけどいいよね?」 平然  
といい放ちそれをポケットへとしまっ。

普段からそんな簡単などにもちあるいてんの?!

なぜだろう、さっきの待宵さん以上の恐怖を今の蓬君に感じる…

……。

「手出して。手錠外すから」

素直に手を出すと器用に銀色の曲がった針金のようなものでいともあっさり手錠の鍵を外した。

わたしもピッキングはできなくも無いけどここまでのスキルは無い。

「生体認証とかは難しいけど、鍵は基本的にいける  
難しいってできるのかよ。  
やっぱり君、諜報員になれるよ。」

「どつするこれ？」

蓬君が足元に倒れている待宵さんを指差す。

確かにどうしようか。

このまま転がしておくか。

ちよつとした意地悪心が頭をもたげる。

さつき手錠を付けてくれたしこのくらい良いよね？

「殺すのはこの状況だと隠蔽が難しいしあんまりどうかと思うんだ  
けど」

蓬君がわたしの思考の斜め上をいく言葉を紡いだ。

「殺すな」

「うん、状況的にやったとしても死体の処理が面倒だし、第一ここ  
住宅地だから目撃者とかの問題もあるし……………得策ではないね」

さらりと怖い事を言わないで欲しい。

待宵さんの事鬼畜だと思ってたけどこいつはそれ以上かもしれな  
い。

待宵さんの場合楽しそうにしてるのがデフォルトでそれはそれで  
怖いんだけど、こいつは平然としているのが怖い。

「いや、そういう問題ではなくてだね……………」

倫理とか。道徳とか。

わたしが言うのもなんだけど、それは度が過ぎる。

「とりあえず殺すのはだめだ。殺すのは」

それに死ぬ前に一度復讐しておきたい。

「せめて縛っておく位にしておきなさい」

「ゆずがそういつなら、そうだね……………」

その響きはどこか残念そうだった。

何が残念なんだ。

結局相談して待宵さんは車に詰めていく事にした。

ストーカーは何も言わずトランクに詰めようとしたが、それは阻止した。

別に可哀想だからとかの理由じゃない。よく考えると後が怖いから。今度会った時に「この間はよくもやってくれたね？お仕置きだよ」とか言い出しかねない。その際は怒りの矛先がわたしではなく蓬君にいく事を願う。蓬君、わたしの横にいた事で結構怒り買ってたし。鬼畜VS鬼畜。夢の対戦？ついでに蓬君があのだサディストを再起不能にしてくれるといい。いや、どっちでもいいか、再起不能になるのは。でも願わくば相打ちになっってくれば良い。

ちゃんと車の座席に乗せたのは親切心位に思っってくれば良いけど。

そんな都合の良い妄想か。

こいつ鬼畜だし。

そんな風に人の行動を素直に受け取ったりしない。どこかしか曲解して解釈する。良いとこなんて褒めない。欠点を詰る。そういうタイプだ。

この場合の具体例をいうとまず蓬君と歩いてた事だろうね。次になんだろう。わたし何にもしてないじゃん。今回は蓬君が勝手にスタンガンで倒して、勝手に殺そうとしただけでわたしは何もしていない。殺しに至っては妨害してるよ？なんだ、心配なんてする必要ないじゃないか。

うん、そうだ。そのはずだ。

まあ、もしもの事はその時になったら考えよう。

サディストが片付いたので再び帰り道の続きを続ける事にした。

てくてく歩み、家と割と近所の公園　ちなみにロリコンと初めて会った場所　の道までさしかかった所で、車道を挟んで反対側の歩道に向かって歩いて来る見覚えがあるような人影が目に入った。  
あいつか？

ここからだと言顔が影になっいてよく見えない。  
本人じゃなくて似てるだけの人だと良いんだけど。  
でもあのブレザーの制服は同じだしな……。  
歩きながら横目でちらちらとそちらを気に掛ける。  
ふと彼方がわたしの方を向いた。

目が合う。 顔も良く見える。  
間違えるはずも無い。

美麗な顔 あの変態どもの中にしかない様な。  
目を合わせたままその顔であいつはにっこりと笑った。

しかし今日はよく会う。  
溜め息を吐いた。

何の呪いだ。

そこにいたのはドMだった。

あのマゾまでなんでいんの？

一瞬無視しようかという考えが脳裏をよぎったが、どうしようか。  
あいつの場合、下手に無視しても放置プレイだなんて喜ぶか  
らな……。。

蔑ろにしても喜ぶというか、蔑ろにすればする程喜ぶって一番厄  
介かもしれない。

罵倒も痛みもこいつには逆効果。

そして変態どもを喜ばせるのは非常に本意である。

仕方がない。 ちょっと声を掛けて、それとなく適当にあしらうか。  
あからさまにすると喜ぶし。

腕を挙げて手を振る。

「笹鳴さん、こんにちは！」

ちよっ、おま、何 してんの？とでも言う様な視線を横のストー  
カーが投げかけてきたが、文句はいうなとドMだったら喜びそうな  
冷たい視線を返し華麗にスルーした。

「ゆずちゃん！元気？」

普通の人みたいに戻すドM。

こつ見ればただの爽やかなお兄さんなのに……………。

本当、残念な人達だな……………。

車が通っていない事を確認し、道路を渡って走り寄る。「こんにちは。笹鳴さんも元気ですか？」

無論笑顔で訊く。

変態どもの相手をする時は笑顔が標準装備だ。いわゆる営業スマイル。

「ああ、元気だよ。ところで、踏んでくれない？」

ああ、そつだ。この人はこつという人だ。

あのサドと足して二でわつたらちようどいいのに。

「お断りします」

そんな待宵さんみたいな趣味も無い。

「ごめんなさい。わたしそんな鬼畜外道みたいな趣味はないんです。さつき倒れている人を道に不法投棄の如く放置しようとしてたけど。」

しかしそれは手錠をかけたりしたからで、趣味とかそんなんじゃない。

周りの美形どもとは違ってわたしは至って健全だ。気持ち悪い言動や行動に蹴りたくなる事はあるが。

「そんな事言わないでくれよ！僕の言う事を否定するなんて あ

あ、そうか！これもゆずちゃんからの愛なんだね！」

違います。

曲解しないで欲しいが、何を言っても無駄だろう。

この人、好きな人に嫌な事されたらそれをツンデレのツン要素どころかデレだと思える人だから……………。

都合の良い頭だ。

面倒臭い……………。

話しかけたのは失敗だったか。放置プレイだろうが何だろうがスルーすべきだった。

よし、迅速に立ち去ろう！

「笹鳴さん、わたしはもう帰りますね。ほら、暗くなるのも最近早いですし」

「そうだね！変質者とかも出るかもしれないし！」

お前もその立派な一人だとは思っても言わない。

喜ぶかどろかは知らないがその可能性があるため悪口の類は自主規制。

「じゃあ送っていくよ！」

え…………。

予想もしない回答が返ってきた。

「いや、いいです。行く方向も反対の様ですし……………」

「遠慮なんてしなくて良いんだよ！」

遠慮じゃないんだ嫌なんだ。

「さあ、行こうか、ゆずちゃん！」

そう言ってわたしの腕を取り歩き出そうとする。

「ちよつ、ほら、蓬君も居る事だし大丈夫ですって」

蓬君の方を指差す。

「蓬君……………？」

初めて気が付いた様な様子で蓬君を見る笹鳴さん。

まさかとは思っけど、気づいてなかった……………？

この人天然なところあるから……………。

「誰？」

待宵さんとは違い笹鳴さんの顔に浮かぶのは純粹な疑問。

「蓬と申します」

対する蓬君は待宵さんの時と同じ様な笑みを貼り付けて。

そんなに警戒しなくても良いのに。

こいつは変な要求をしてくるものの、こちらを害する事はない、多分。

「僕は笹鳴だよ。はじめまして」

「知っていますよ」

わたしのストーキングの一貫だね。

「なんで？」

心底不思議だというように笹鳴さんは首を傾げた。

「初対面だよな？」

「ええ……………」

墓穴を掘ったな、蓬君。

「えっと、それはですね」

あたふたしだす蓬君。

レアだ。

写真撮ったら売れないかな？

需要はあるはずだ。ファンとかついてそうだから。

「ほら、ゆずから聞いて」

待宵さんに言ったのと同じ内容で言い訳する。

「そっか、僕の事話してくれてたんだ！嬉しいな！」

無邪気だな、笹鳴さん。

「ゆずは僕が送っていきますから、大丈夫ですよ。これもあるし」

蓬君はポケットから取り出したそれを見せるとペン回しした。

「？」

「スタンガンです。威力は人を殺さず気絶させる程度。他にも色々持ってますから安心して下さい」

ん？今、他にもって言った？他にもそんな危なっかしい物持ち歩いてるの?!

安心しろったって安心できない発言だった。

主にわたしが。

なんか隣にいるこれが一番危険なんじゃって気になってきた……………

…。

わたし、こいつと歩いてて良いんだろうか……………？

「じゃあゆずちゃんの事は頼んだよ、蓬君」

「はい、分かりました。任せて下さい」

って笹鳴さん、わたしの事送らせちゃって良いの？

わたし、そこはかとなく、こいつと下校する事に疑問を覚えちゃ

ってるんだが。

「うん、任せたよ。じゃあね」

あ、行っちゃうの？

いやさ、ここはもつと僕が送ってくとかのたまものじゃないの？！

素っ気なくない？！

「行こうか、ゆず」

本当に大丈夫なんだろうか……。

DMと邂逅した所から百メートルもしない所で今度はネクロヒイリアに出くわしてしまった。

何故お前まで出てくる。

今日は厄日だ。朝の星座占いは十二位だったに違いない。

それはもう、ばったりと出くわした。

真っ直ぐ進行していたら、その前方から近づいてくる人。黙つてれば普通に通り過ぎる事が出来るかと思つたが、その距離が一メートル程になったところでわたしは無理だと気付いた。

進行方向に立ちはだかるひよろつとした美青年。左目だけが青い。別に通せんぼなんて子供っぽい真似をしている訳ではない。

単に歩道が狭くてよけようと動いたら相手も同じ方に除いて道を通そうとする現象。つまり、道の譲り合い。

ついでに蓬君はわたしの後ろに張り付きワンテンポ遅れて動いてる。

「どござ」

わたしが言った。

「ゆずりんが先にどうぞ、っていうか死んで」

「相変わらず脈絡のない人ですね」

「だって思っただよ。ゆずりんが死んだらその亡骸は最高だろうなっつて！」

「死んでなくてもわたしは最高です！」

ナルシじゃないからそんな事思っちゃいないけど。

「その『ゆずりん』ってなんですか！」

「ん？新しい呼び名だけど。可愛いでしょう」

さっきのDMは天然だが、この死体嗜愛はマイペース。しかも思  
い込み暴走型。

『可愛いでしょう』ってどこかの探偵みたいな思考だな。

そんな事言つてはいけない。兄様に失礼だ。

「個人的な希望をいえばね、服毒死がいいな！外傷のあるものはい  
ただけないよね。傷によつては全体のバランスで美しさを引き出す  
ものもあるけど、ゆずりんは肌が綺麗だから傷つけてしまうのはも  
はや冒涇といつていいと思うよ！あと溺死なんて駄目だよ。醜く膨  
らんでしまつては元の美しさが台無しじゃないか。でも屍籛化した  
ものだつたら認めるよ。美麗な屍籛化死体はそれだけで価値がある、  
ゆずりんなら尚更さ！焼死体も絶対駄目だからね。焼け焦げよりだ  
つたら骨の方がまだ美しいよ。骨はあれはあれで流麗な機能美を備  
えていていいんだけど、やっぱり生身にはかなわないね。それから

—

「わたしは今のところ死体になる予定は無いの。ごめんなさい」  
一蹴。

「え、そうなのかい？」

自殺志願ではないんで。

うーんと一人悩むネクロヒイリア 桐花さん。

考えてる隙に通り越してしまおう。

そう思い動き桐花さんを一步後ろにしたその瞬間、この人物はと  
んでもない事を口走った。

「なら私が殺せばいいんじゃないか」

合点して手を打つ音。

背筋が凍る。

わたしは逃げた。

そのまま全速力で走って逃げた。

そんなわたしにヤンデレ萌えの素養は無い！

殺されたいとか思わない！

だが根っから文系。変質者に会いたく無いので登下校以外ほとんど外に出ないわたしは体力がなかった。

走った道は確実に家路だったので迷ったりはしてないがそう進まないでバテた。

立ち止まる。

息切れをしていた。

深呼吸、深呼吸。

すーはーと繰り返すと息が落ち着いてきた。

久しぶりにこんな全力で走ったかも。

背後から蓬君の声が聞こえた。

「ちよつと、置いてくなつて！」

「あ、忘れてた」

「ゆずつてさ、何気に性格酷いよね」

「そういう君が酷い。人に性格酷いとかいうものじゃないよ。まあわたしの性格が歪んでるのは認めるけど。というかあんな変なの達につけ回されたらまともに育つはずがないじゃない」

むしろあの環境にしてはまともに育ったんじゃないかな。

「蓬君つてさ、普通にしていると案外存在感ないよね。ストーリーキングされてた時の方が存在感あったかも……………」

「そういうところもだ、酷いっていうのは。人が気にしてる事をわざわざ指摘して」

「気にしてたの？」

「美形にありがちなオーラがないとか、影薄いとか、神出鬼没だとか散々言われるよ？僕はただ普通に生活してるだけなのに！」

「普通の生活の中にストーリーキングは含まれない」

「僕にとっては普通だよ」

「一般社会の価値観を適応しろ」

「そんなもの知らない」

「君も本当に残念な美形だよ……………」

「残念で結構」

「なんていうか……君って斜め下にずれてるよね。少し修正すれば乙ゲーのキャラでもいけたのに」

「乙ゲーやるの？」

「現実の男には見切りつけてるから。二次元に走りたくもなるよ」

「この世界がゲームだとして、攻略はいかに好意を得るかじゃなくていかに回避するかだよな」

「言うておくけどその中には君も含まれてるからね？」

「ある程度、変なのは駆除してたよ？」

「するんだつたら全部駆除しろ」

「ゲームだったら僕、ゆずの手伝いしてる事になるんだけど」

「対象なのに手伝うとかバグじゃないの？」

「ひどい」

あ、そうだ。

「蓬君、取引しない？」

「？」

「わたしは君のストーリーキングを黙認する」

もとより何を言っても無駄だ。

いつもどおりに我慢すれば良い訳だし。

「その代わり、あいつらの接触を最小限に抑える。最小限っていうのは限りなく0に近くって意味。どう？」

あのカメラとかスタンガンがあればできるだろう。

どうせストーリーキングされるなら利用してしまえ。

「……………」

蓬君はしばらく考え込んだ。

「0ってのは流石に無理だと思う……でも出来る限りの努力をすればいいんなら受ける」

「じゃあ取引成立ね」

「あの人達を抑えるのは難しいよ？何回か失敗してるから。どっちかっていうと勢い負けする」

「ああ、君、勢い無いもんね。下手に王子様スペックだから頑張るとかあんまり経験ないでしょ？いつつも涼しい顔してクリアしちゃうんだから。羨ましー」

「僕だつて欲しくて手に入れた訳じゃないし、このスペック」

「その台詞はイヤミでしかないよ？」

ストーリーカー王子め。

「基本あいつらをどうするかについては問わない。ただ一つだけ条件がある。殺すな」

「殺さなきゃいいの？」

「出来るだけ法に触れる事はやらないで欲しいんだけど、まあ君がそれは勝手にやる事だから。でも殺すのはやり過ぎかなって。わたしにも人並みに憐憫の情とかはあるの。あいつらに何かあったらざまあみろとも思っけど可哀想にとも思っの」

「了解」「とりあえず帰りましょうか」

あ、でもロリコンがいた。

「ああ、その前にカメラ見れる？日永さんのところの」

「ああ、今出すよ」

「ごそごそと鞆からノートパソコンを取り出した。

「そろそろいなくなってもいい頃合いだと思っただけど」

「あーあの人まだいなくなってないよ」

「え、まだ？」

「というか寝てる」

「なるほどね。ならそれ程警戒する必要もないよね。何事もなかったかの様に通り過ぎればいいんだから」

予想とは違うけどまあまああの状況。

帰り道を急いだ。

日永さんはカメラで見た時と同じ様に寝ていた。

と言っっても側を通る際ちらつと目撃しただけ。

良かった。こいつとは遭遇せずに済んだ。いや、遭っには遭っただけけど直接対決せずに済んだ。

そう思ったのも束の間。

白い車を五、六歩後にしたところで、背後から鳴り響くエンジンの音。それと人の声。

「ゆずりはー」

ここは振り返るべきか否か。

名前呼ばれたし無視したらばれるよな……。

こいつの場合、無視しても復讐とか考えないからいいかな……？地味に一人で凹んでるタイプだし。そう、一人で隅っこの暗がりとかでうじうじしてるタイプ。

それなら問題ないか。無視しよう！うん、そうしよう！

その瞬間だった、再び名前が呼ばれたのは。

「ゆーずーりーはー！！！！」 かなりの大声だった。それは鼓膜に危険を覚えるレベルで。

「何ですか！？近所迷惑です！！」

あ、思わず振り返ってしまった。

日永さんは車の窓を開けてそこから顔と片腕を出していた。その手には拡声器が握られていた。

だからか、あの大音量は。

「無視するからだよ」

「寝てたんじゃなかったんですか？」

「ゆずりはから声かけてくれないかなあって」

「人の安眠妨害なんてしませんよ」

「寝てなかったし」

「そうですか。ではさようなら、ロリコン」

「ロリコンじゃないよ、それはゆずりは限定だから！」

「何を言っているんですか？十歳の少女をナンパする二十三歳はロリコン以外の何ものでもないでしょうに」

「古い話を蒸し返して。何度も言うけどゆずりは限定だからね！」

「十三歳差っていったら今でも犯罪ですよ？」

「愛があれば歳の差なんて関係ないんだよ！」

「聞きようによっては素晴らしく聞こえる台詞ですが、それは相思相愛歳の差カップルに限ります。一方通行だったら単なる犯罪者ですよ」 ああ、家はすぐそこなのに……………」

「じゃあ、日永さんさようなら」

蓬君の肩を叩く。

「後は任せた」

そしてわたしは家まで駆け出した。

家までの距離は後少し。百メートルもない。さつき全力疾走して疲れていたがこれ位ならいける。

家の姿はもう見えていたので玄関の扉に向かって一直線だった。

扉のノブに手をかけると思いつき引き中に入り、勢い良くドアを閉め鍵を掛けた。

ふうと息をついた。

学校から家まで一キロメートル足らずなのにやたら長かった気がする。

「どうしたの？」

中学生の弟が顔を出した。

「ゆず姉、お帰り」

「ただいま」

「なんかあったの？」

「いや、変なものに出くわした」

「ゆず姉は僕が守るからね」

「なんか成長したね、木立よ……………」

お姉さんは嬉しいです。

「ゆず姉に害なす者は僕がすべからく退治してあげるから。安心して」

退治って発想が穏便でない方になってるけど、まあいいや。蓬君みたいに殺そうとはしないだろう。

とりあえず靴を脱ぎリビングへ行く。

「ゆず姉は掛けてて」

ソファに座ると弟がジュースを出してきた。

「走ってきたから喉が乾いたでしょ？」

「至れり尽くせりだな……………」。

「ゆず姉は可愛いんだから、気を付けて歩かなきゃだめだよ」

「十分気は付けてますとも」

自分の姉を可愛いとかいう弟ってどうなんだろう……………？

弟が頭を撫でてきた。

ぞわつとした。

まさかこいつもか……………？

恐る恐る弟の顔を見上げる。

弟は慈しむような愛情深い表情でこちらを見ていた。そして何よ

りその目。視線に帯びる熱はあいつらと同じもので

お前もか！！

「お姉ちゃん、自分の部屋行くから！」

急いで自室まで階段を駆け上がった。

わたしにブラコンの気はない！！

ついでに言えばシヨタの気もない！！

実の姉にそんな目向けんな！！

部屋に籠もると鍵を閉めた。

家にも気を抜けないとは……………。

逆ハ―属性、恐るべし。

どうしたら一息つけるんだ。

わたしはドアの前にくずおれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3749ba/>

---

とある逆八ー女の受難

2012年1月9日20時50分発行